

子どもが初めて出会う絵本

私は絵本の専門家でもないし、それほどたくさんの絵本に接しているわけでもありません。十年前に短大の幼児教育学科に勤めるまでは、臨床心理学という分野において、様々な問題を抱えた子どもたちや、精神科に入院している方々とお会いする仕事をしていました。

ところが、そのころ（今も）育児の中で、幼児教育の中で、子どもを追いつめるような状況が日に日に強まっていました。ですから、様々な問題にぶつかって挫折して苦しんでいる子どもたちの治療に困っておりますと、一人の治療をしている間に、その何倍もの新しい患者さんがつくり出されているというようないきなり出されてくるのでした。そこで私は、つくり出されてしまった問題を解決するより、問題をつくり出している現場に入りこんでいって、予防できるものなら……と幼児教育の分野に足をふみ入れたわけです。そして「ことば」についての講義を

受け持ったことと、我が子を育てる中で、「ことばのとも」をはじめ、さまざまな絵本から学びながら十年間がすぎたというところから。そして我が子を通して見てゆく中で絵本が子どもの成長に与える大きさを知り、読みかきかせが子どもの人生におよぼす影響の深さを感じています。前置きが長くなりましたが、そんな私が、今絵本について思っていることを、何回かにわたってお話ししてゆきましょう。

私は子どもがおすわりができるようになる五、七ヶ月頃から、ひざに抱いて絵本を読んでやるようにしました。わかしつけながらのお話（素話）は生まれてすぐからしていたと思いますが、おすわりができる以前は目の前の絵本と母親の語りとがつかず、絵本をつかもうとしたり、母親の口元に見入ったりすることが多かったものですから、読みかきせより、語りかきせを中心にしていた

ように思います。八ヶ月ころからは、はつきりと絵本とお母さんの口から出るお話との関係をつかみはじめます。

一歳をすぎると自分で本を選ぶようになり、一歳から一歳半（もうすこし幅をもたせて二歳までくらい）の間に、その子の人生にとつてはじめての「お気に入りの本」が登場します。その子は本棚からいつもその本を取り出してきては「読んで」とせがみます。そして何回も、時には十回以上もくり返し読んでくれとせがみ、それが何日も、時に数ヶ月続きます。その本はその子の人生を暗示するかのようなテーマに満ちあふれていることがあります。

我が家の場合、長男が選んだのは『はなをくくん』と『よあけ』でした。春の訪れを喜ぶ動物たち、夜



1

明けと共に舟をこぎ出す少年……まさに人生のスタートに長男が選んだ本らしいものでした。長男は『よあけ』の本の最後のページをめくりながら、その度に、そこに描かれている「陽の光」に負けないほどの満面の笑みで私を見上げるのでした。

長女は『きのほりこねこ』でした。一歳になったばかりでまだ伝い歩きだった長女は片手にこの本を持って、はなが私を追いかけ回したものでした。お母さん猫の昼寝中に本登りをした子猫が、気がつくとも木からおりられない。そして子猫のなき声で目をさまし、くわえて連れおる母猫……。

冒険、旅立ちの背景には「いつかは戻れる母港」への信頼が必要です。ですから出発のイメージは必ずしも「旅立つてゆく」ばかりでなく、いわば「母港」の暖かさを確認するものも含まれるでしょうし、そのどちら

かに重きを置いた絵本を子どもが選ぶかは、その子の性格と結びつけて考えてみる時、数々のヒントを母親に与えてくれるものであるように思います。

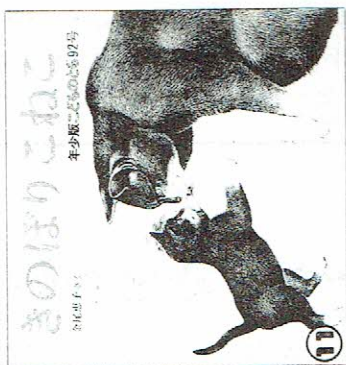
次男の場合は『はくねえ』というむし。きなきの殻を脱いだ生まれたばかりのてんとう虫が、草の茎をどんと登り、おてんとうさまめざして飛び立つ……。まわらない舌で「どちゅうへー（はくねえ）どちゅうへー」とくり返し叫んでいました。やはり誕生と旅立ちのテーマでした。そして「根っこ」ということばが、一歳の子どもの口でも発音しやすいことばであることの不思議さも、この本から教えられました。絵本のことばは決して「お子様向き」のことばである必要はないのだ……と。

子どもは母に守られた乳児期から一歳を過ぎたころ、心の中で一つの出発をするのかなあと感じます。そしてそんな時に自分にピッタリ合ったテーマの絵本に、心が出発の友として出会えた子は幸せです。くり返しくり返しその絵本を読んでもらうことで、その子は心の中で、主人公とともに、旅立ちの際に出会うであろう不安やおのき、明侍やあこがれをくり返し体験することになり、つまり人生の出発のためのイメージ

トレーニングがなされるわけですから……。はじめて選んだお気に入りの「出発」のテーマの絵本でなくてもこの時期にたくさんの絵本を身えられた子どもがその中からお気に入りの本を自ら選出す時、きつとその中に、その子が選びとつた「出発イメージ」がみつかります。どんな絵本を自分のお気に入りとして、自分の出発イメージとしてその子が選ぶか、これは親として、とても興味深いことではありませんか。お母さん、是非その子にとっての絵本との「出会い」を発見し、そんな絵本を大切にしておいて下さい。そんな絵本を見つけて出してあげようというあなたの心がまた、子どもと絵本との「出会い」を生み出すものでもあるのです。そして私は、我が子たちがはじめて選んだこれらの「お気に入りの本」を、この子たちがおとなになって本に私たちの元から出発する時にプレゼントしてあげようかと思っています。

- ☆『よあけ』シゲルミヤザキ文・絵／種田 典三
- ☆『はなをくくん』クラウス文／サイモン絵／本島始訳
- ☆『きのほりこねこ』金尾恵子著／年少版／ことばのとも92号・現在品切れ
- ☆『はくねえ』てんとう虫し／石田恵二編成・絵／奥本大三郎文（同前号・現在品切れ）（いずれも福音館書店刊）

2



絵本が育てるもの

なぜ絵本を読んでもらうことが、子どもの発達にとって「いいこと」なのでしょう。それは、絵本を読んでもらうことで、「子どもの心が動く」からです。ワクワクしたり、ドキドキしたり、ハラハラしたり、悲しくなったり、そしてそんなことばで言い表しきれないほどの心の動きを、子どもは絵本を読んでもらいながら体験しているからです。子どもは主人公に同化して、主人公のワクワク、ハラハラ、ドキドキ、シェーンを共有し、共感しているのです。そんな風に心が動くとき、ひとつずつ心の中にひだが生まれて、それが深くなってゆくのだと思うのです。だから「心が育つ」のです。

心の動きが擬音語や擬態語で表現した時にいちばん実感に近いと感じるように、擬音語や擬態語で書かれた絵本は、理屈なしに体に伝わって心を動かします。「ころころころ」「つんぷわふわ」「はつたくん」「もけら」などの絵本がそうです。

子どもたちは音や形をまず体感で感じとります。この、体で直観的に感じとる力がいちばん豊かなのは、字がよめるようになる（あるいは、字をよんだら分かるということが理解できるようになる）前までの幼児期であるように思います。これには一つの思い出があります。長男が四歳、長女が二歳半の時、ある彫刻展を見に行ったことがありました。その時長女は一つ一つの作品をただひたすら自分の直観でとらえて感動しているのです。「わああぶない！だね」「高い高いな！れ、だね」「すきすき！だね」それはもう体中で感動にひたっている姿でした。ところが、そのころもうひらがなが読めはじめていた長男は作品についている表題を読もうとし、「みらい、だつて」「とう、だつてさ」「これは何て書いてあるの？」という理解のしかたをしようとするのです。私はその時、「字が読めるのは遅い方がいい、

それだけ体中で直観的に感じとる時代が長く豊かになれる」と思ったのでした。字が読めるようになる、あるいは字で書いてあることを通して理解しようとするようになるということは、人間が本来もっていたすばらしい力の一つ失うことを代償として支払わねばならないことのような気がします。どうかあせつて字を読ませないで下さい。体感と直観と感動に満ちた、文字のない世界を、子どもたちができるだけ大きくなるまで体験させてあげたい（どうせいつかは失われてしまうのだから、その失う時期はできるだけ遅く）と思いませんか？

人はやがて、文字に満ちた世界へと入ってゆきます。絵本や本の世界もまたその一つですが、そこで伝わるのは「ことば」だけでなく、イメージであり、心です。大切なのは先に言ったように「子どもの心が動く」ということです。ところが今、絵本を読んでもらっても、心動かない子どもが増えている……。これはいったいどうしたことだろうと思つて、た時、ある園でこんなことに出会いました。

ちようど先生が「3びきのくま」の絵本を読んでもらっていたので見てみると、読み終わって先生はこう

3

言いました。「さあ分かったかな。じゃあ、はじめ女の子はどこに行ったのだった？」すると子どもたちは「森の中」「クマの家」「女の子がクマの家に行ったね、はじめに女の子がしたのはどんなことだったかな？」「スーアのんだ」「イスにのつた」「それははじめ誰のイスにのつたんだ？」「お父さんの、大きい」「……」こうして延々と記憶テストがなされてゆきました。そして正しく記憶していたと評される子が、よく聴いていたと評されるのです。「三びきのこぶた」の本を読めば「お兄さんクマはどんな家を作った？」「ぐらんばのようちえん」を読めば「さいしよにぐらんばが行ったのはどこ？」「次は？」「例をあげるときりがありませんが、子どもたちはそのお話の世界に浸ったり、主人公の気持ちに同化したりする間もなく、次々と質問に答えねばならないのです。これは感

動できない、感動してもすぐ白ける子どもをわざわざ作り出しているようなものです。私の授業で「読後質問はするな、絵本を読んだらそのまま『おしまい』と閉じる」と教えられた学生が実習に行つてその通りにしたら、その園の先生から「本を読んだあとはその本の内容にそつて子どもに質問しないと、子どもがどのくらい分かつてきているか分かりませんよ」と指導されて帰つてきました。

「保育雑誌」に載っている「お話」には、最後に「お母さんへ」という囲みをもつけ、「このお話を讀んだあと次のような質問をして、お子さんの理解を確かめて下さい」と読後質問まで書いてあるものもよく見ます。そういう中で育つ子どもたちにとっては、絵本は「テスト問題」になってしまうのです。だから、何度か読んで中身（あとで書かれると思われる質問の答え）が分かつた子どもはこう言います。「その本、もう知つてるから、読まなくていい」と。そういう子どもたちはもはや、主人公といつしよにハラハラ、ワクワク、ドキドキはしていられません。そんなことをしていたら、あとの質問に答えなくてはならないような細かいことを覚えていられないからです。心動かざる、話にのめり

こまず、一つ一つを順序よく覚えて、おかねばならないからです。こんな子どもたちをたくさん作り出してしまつていく読後質問が、今も多くの園や家庭で続けられているのではないかと思うと、「今の小学生たちが、身をのり出して話をきくとか話にひきこまれるとかいうことが少ない」と先生たちが嘆かれるのも、もつとも思われてしまうのです。

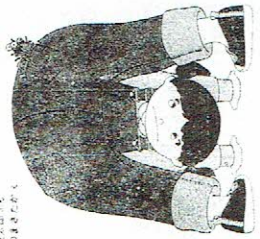
絵本を読んでもらうのは、その本の中身を覚えさせるためではありません。子どもの心をゆり動かし、心を育てるためなのです。ですから、どうか絵本を読んだあと、内容について質問をしないで下さい。主人公といつしよにハラハラ、ドキドキさせ、じつとその本の中の世界に浸りこませてあげて下さい。それが、子どもの心を動かし、育てることなのですから……。

- ☆「ころころころ」元永定正さく
- ☆「つんぷわふわ」谷川俊太郎文／なかのまきだか絵
- ☆「はつたくん」五味太郎さく
- ☆「もけらもけら」山下洋輔文／元永定正絵
- ☆「3びきのくま」トルストイ文／バスネツォフ絵／小笠原豊樹訳
- ☆「三びきのこぶた」イギリス昔話／瀬田忠一訳／山田三郎絵
- ☆「ぐらんばのようちえん」西内みなみ文／堀内誠一絵

(いずれも福音館書店刊)

4

こづん ふわふわ



絵本でしつけ？

教育熱心なお母さんは、絵本も「教育」のために与えようとしします。絵本を子どものしつけに「役立てよう」として選びます。偏食をなくしたい、早くねるようにさせたい、自分で着脱衣ができるように、歯をきちんとみがくように、おふろが好きになるように、友だちと仲良くできるように……。しつけのための……。と銘うったお話や絵本は、そのような親に好まれます。しかしそこに載っている話は、私が「脅し童話」と呼ぶものであることが多いです。脅し童話の代表的なストーリーを言いますと、「外から帰ってきたコンちゃんがおやつを食べようとする。お母さんは「手を洗ってね」と言うけれどコンちゃんは「洗ったよ」とウソをついて食べてしまう。するとその日の夕方、コンちゃんはおなかを痛くなくなってしまう。夕ごはんは大好きなカレーだったのに、コンちゃんは食べられませんでした……」というようなものです。手を洗わずに物を

食べたら、あとでおなかを痛くなるぞ……という脅しです。おもちやを出しっぱなしで眠った子の夢の中におもちやが泣いている姿が出てきたり、おふろが嫌いな子の夢にその子の背中に住んでいるバイキン君が登場したりというのもその子を脅して（怖がらせて、悲しがらせて）何かをさせようとする意図をもっているのです。脅し童話に含められます。おさるさんの運動会でにんじんの嫌いなサル吉君はいつもビリ……というの、やはり同じ意図で構成されていますから、こう見てくると、私たちの周りには、ずいぶん脅し童話があることが分かります。

では、どのようなしつけのあり方が子どもにとって良いのでしょうか。本来しつけとは、子どもにとってどうあるべきものなのでしょうか。それは、その子が「その気になる」ということではないかと思えます。お

ふろに入りたい気になる、歯をみがきたい気もちになる、〇〇を食べたい気もちになり、早くねたい気もちになる……。しかもそれが脅されて嫌なことから逃げるためではなく、そうするとたのしいことに出会えそうだから……という動機で「その気になる」ことが大切なのではないでしょうか。

「おふろだいすき」はじめてのおつかい「くまぐんのあくび」「くつつあるけのほん」などは、「しつけ」のための本ではありませんから、決して、そうしなさいとも、そうしないと嫌なことになるとも書いてありませんが、そうしたらたのしくなり、そんな世界へ導いてくれることで、子どもたちは喜んでおふろに入ろうとし、おつかいをかかってでてくれ、みんなにあくびをかけて回ってほトツと寝てくれ、自分でくつをはこうとしてくれるのです。



5

長男が一歳半のころ、お風呂に入るのを嫌がる時期がありました。服を脱ぐのさえ嫌がつて、しがみついて泣き叫ぶ長男に、私ははじめに試みたのは、節をつけてうたったり読んだりしていた「おふろでちやぶちやぶ」でした。

父親がタオルと石けんをもってお風呂に入り「はやくおいで」と声をかけ、私が息子の服をぬがせながら「まっつてまっつて、今セーターぬいだとこ」とうたいまわすと、息子はつられてスツと脱いだのです。そして、パンツまでを順にうたにに合わせて脱いで「わーい、はだかんばだーい」と叫んでお風呂にとびこんでゆきました。この手で服を脱がせれば、いやがらずにお風呂に入ることが何カ月か続きましたが、「おふろ好き」ではありませんでした。

それがコロッとかわったのは二歳

のころです。砂あそびをしているとき、砂場のおもちやの中に、「おふろだいすき」に出てくるアツカソウのくりのあひるをみつけた時でした。

「アツカだ！」と叫んだ息子は「おふろはいるー！」と居間からおふろに入り、「耳のうしろを、わすれずにあらつてくれたまえ」なんて言いながら、ひとりて体を洗っていました。

子どもは、自分で自分をのりこえるきっかけを見つけて出す力があるのだなとつくづく思いました。そして親ができるのは、のりこえてゆくきっかけになりそうなものを用意することだけで、そのきっかけをつかむのは子ども自身であること、自分をつかみとった時の子どもは、生き生きと輝くことを、この時思い知りました。

それに対して私が脅し童話とよんでいるような話は、まず子どもが何回も「読んで」とせがむことはめったにありません。そして、その「しつけられたこと」をしても、子ども自身はそれによって生き生きすること、自分が一歩大きくなったと自覚することもありありません。つまり、脅し童話で「しつけられた」子どもは、自分の行動を自分で選び

とつたという主体性に欠け、「おしつけに従う」だけの子どもへの道を歩んでしまうことになりやすいのです。

絵本を選ぶ時に基準にしてほしいことの一つは「親自身も、何度も読んでみたくなる、楽しめるもの」ということです。決して「これは子どものしつけにいいだろう」という、「教育的配慮」で絵本を選ばないで下さい。そんな本は読んでもらう子どもも決して楽しくはないのですから……。人はたのしい時に、心はずんで心動く時に、いちばんたくさんそのことを吸収するように思います。しかし、親が絵本を子どもにおしつけた時（絵本でしつけようと思った時）、子どもの心は絵本から離れていってしまうように思うのです。

親と子が一緒に感動して心はずんでたくさんものを吸収する場、そんな絵本との出会いであってほしいと思います。

- ☆「おふろだいすき」松岡享子作／林明子絵（福音館書店刊）
 ☆「はじめてのおつかい」筒井頼子文／林明子絵（福音館書店刊）
 ☆「くまぐんのあくび」角野榮子文／佐々木洋子絵（ポプラ社刊）
 ☆「くつつあるけのほん」林明子文（福音館書店刊）
 ☆「おふろでちやぶちやぶ」松谷みよ子文／岩崎ちひろ絵（童心社刊）

6



書きかえられたお話たち (1)

わが子の人生が順調であつてほしいと願わない親はいないでしょう。わが子が嫌な思いをしないように守つてやりたいし、苦勞の少ない道を歩んでほしいと思う気持ちは、親なら誰でもあるでしょう。けれど、わが子を嫌な思いや不快なことや苦しいことや痛いことから遠ざけようとして、親がどこまで手を出すかというところになると、一人一人の思いは違つてくるようです。

私は、はじめての子が生まれた瞬間、「この子は、おなかのすいたり、のどがかわいたり、体が冷えたりすることのなかつた胎内にいることよりも、この世に出て、自分で生きることを選んだのだ」と何かすごい啓示を受けた気がしました。赤ん坊は、おなかのすいたといつては泣く、おしめがぬれたといつては泣く、暑すぎるといつては泣く……、あらゆる欲求を泣くことによつて訴えます。生まれてから最初の三ヶ月間は、その子が、生まれ出たこの世界に対し

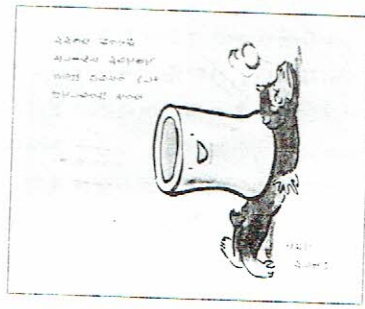
て非常に漠然とではあるけれど、根源的にもいえる基本的信頼感を身につける時期だと言われています。その時期に、自分が泣き、訴えることに對して、この世界（もちろん主に母親が世界を代表するものとして認知されますが）は必ずこたえてくれ、不快を取り除き、快く満たされた自分に戻してくれる……このくり返しによつて、その子は「自分が生きていくことが許されている」という感覚を、すべての感受性の基盤として持つことができるのです。こうみてくると、赤ん坊が泣き、訴えることが、その子の基本的信頼感を育む上でなくてはならない一方の要因であることがわかるでしょう。

布おもつ、紙おもつ論争は様々な形で論じられていますが、子どもの心の発達という観点からこのことをみると、まさに紙おもつの特徴である「子どものおしりが不快でない」ということに最大の課題を感じるの

です。つまり、不快になり、泣いて訴える回数が減るということは、すなわち、不快・訴え→応じてもらい・満たされる、ということのくり返しの回数が減るということになり、つまり、この世に対する基本的信頼感を育む絶対数が少なくなるということとだからです。泣かない状態を作り出すことは、信頼感が育つ基盤を奪うことになりかねない（もちろん、逆かならずしも真ならず。ですが）と、ここで私たちは自戒しなければなりません。

しかし、「気持ち悪いより悪くない方がよからう」「不快な思いはさせない方がよからう」「苦しいより楽しい方がよからう」「汚いより美しい方がよからう」という発想は、紙おもつに限らず最近の子育ての様々な側面にみられ、その影響は絵本にまで及んでいると思われるのです。

「みにくいあひるの子は、とぼとほ



「かにむかし」より

と歩き出しました。ぼくのほとんどのお母さんはどこにいるんだろう。むこうから白鳥の親子がやってきました。「わあ、きれいな鳥だなあ」と思って見ていると、その白鳥のお母さんが言いました。「まあ、卵の時に迷子になった私の子がこんなところにいるわ。あなたは私の子どもなのよ。みにくいあひるの子は、本当のお母さんのところにかえりました。よかったね」

ある保育雑誌の中に、「この『みにくいあひるの子』のお話をみつけた時は愕然としました。書きかえた人にとつては、みにくいあひるの子が「仲間に入れてほしい」と近寄つていっては冷たく足蹴にされることのくり返しが嫌だったのか、子どもにとつてはよい方だと思つたので

しょう。

『かにむかし』（サルカニ合戦）の「おきな石うすが どしーんと おちてきて、さるは ひらとう べしやけてしもうた そうな」という結末も、子どもたちは「ヤッター！」と大喜びしながら、年長になるに従つて、「べしやけてしもうたさる」が気になるようになります。すると「サルはごめんささいとあやまつてカニと仲直りしました」と書き直されたお話が登場してきます。

また『こぶじいさま』のお話でも「となりのじいさまは、こぶを一つくつつけて、ほんばり ほんばりとむらへ にげかえた」という結末が、最近出会った絵本では「画はほにこぶがついてしまつて泣いているじいさんのところに、こぶのとれたじいさんがおにぎりをもつてきてくれて、そのおにぎりをたべたらこぶがとれた」となつてしまつていました。

こんな風に「そうなら嫌だな」と感じそうところをすべて丸くおさめて、めでたしめでたしのお話に作りかえてゆく心性は一体何なのだろうと考えると、今の子どもたちや若者たちが、性格の暗い面を嫌い、汚れる仕事を嫌い、明るく軽く、深く関わらず、「誰かがしてくれて、

うまくいくんじゃない？」といった根拠のない楽天性（裏をかえせば、この世界に対する基本的信頼感の欠如）のもとに第三者的であらうとする生き方につながつて見えてくるのです。

ある時、私が三年生の長男に「どうしてもっと早くお母さんに相談しなかつたの！」と言つたことがありました。その時彼は「お母さんに言つたら、すぐ、どうしたらいいか答えが出てくるやろ。ぼくは自分で考えたかつた」と言つたのです。

私たちは、子育てに向ける時間的、精神的、経済的余裕ができてくるにつれて、子どもが本来自分の力で直面し、出会つてゆく中で学んでゆく様々な体験（心の中の体験も含めて）を、親心という名のもとに奪つてしまつていのではないかと反省させられる思いでした。

書きかえられたお話たちは、そんな私たちの子育てのあり方の「病理」を如実に示してくれているように思えます。

次回も引き続き、そんなお話たちをとりあげてみたいと思います。

☆「かにむかし」 木下順二文・清水巖絵
（岩波書店刊）

☆「こぶじいさま」 松居直直話・赤羽末吉画
（福音館書店刊）



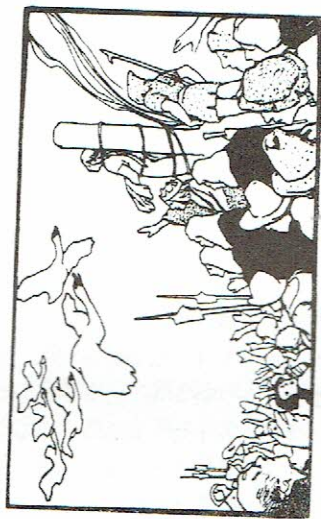
「こぶじいさま」より

書きがえられたお話たち (2)

昔話がなぜそれほど長い間語りつがれてきたのか、あちこちに類似した話があるのかと考えると、まずそれらが、すべての時代を通して、人間が生きてゆく上において必要であった。からだと言えましょう。つまり、人間が生きてゆく上で、要るから役に立つ。形で残されたのだとすると、最近目立つ昔話の書きかえは、何かをそこなっているように思えてなりません。先人たちが昔話を通して次の世代に残そうとしたものは何だったのか、前回に引き続き、書きかえられたお話との比較の中から、それをさぐってみたいと思います。

グリムの昔話の「六人の白鳥」のお話で、最後に姉妹が、魔法で白鳥にされた六人の兄弟を救うために編んだばらの上着を空に投げるシーンがあります。私が昔読んでもらったお話では、六枚のうち最後の一枚だけは片袖が編み上がってなくて、

末の王子の片腕は白鳥の翼のままなのでした。姉妹は隣国の王と結ばれて、めでたしめでたしで終わるお話なのに、私はこの末の王子の片腕が頭にこびりついて離れませんでした。「私だったらどうしてやれるのだろう。あとから編み足してもいいのかしら……。お兄さんの上着を借りて着たら、もどに戻るのかしら……。あでもない、こうでもない」と、



「六人の白鳥」(『グリム童話全集』小学館刊)より

なり、それを何とか自分なりに融かそうと、必死に力をふりしぼっているように見えました。

アンハッピーエンドあるいは結末の中に残されたアンハッピーな要素は、読んだ者(聴いた者、見た者)の心の中に「自分ならどうするか」「自分の力で何がしてやれるんだろう」「自分でできることは何だろう……」という問いかけを呼び起こす力をもっています。この自分への問いかけを、昔話や絵本、芝居といったファンタジーを通して、心の中で何度もくり返し体験してゆくことは、自分の人生に何かがおこった時に、あるいは自分の周囲に何かがおこった時に「自らの手で」「自らの力で」できるだけのことをしようとする人間を育ててゆくのではないかと……と、思っています。最近、読者の心をかき乱すようなアンハッピーな終わり方が特に嫌われて、書きかえられているということは、今言ったような人



「マツチ売りの女の子」(『アンデルセンの童話』・書房の女王、読者館書店刊)より

間を育てるのとは逆の方であるということになります。

十九世紀初頭に、昔話と民話の宝庫、北欧に生まれたアンデルセンの童話にも、昔話にみられる人生の知恵が生きています。

「マツチ売りの少女」の結末は、原作では、燃えつきたマツチの束をもつて死んでいる少女を見つけて、町の人たちが、「この子は、あたたまるうとしたんだね」と言うだけです。すると読者の方は、「生きてる間に、もつとやさしくしてやればよかったのに」「マツチを買ってやればよかったのに」「家に入れてやればよかったのに……」等々、さまざまな思いにさいなまれます。つまり、心が乱れ、動くのです。(動くから育つのです)

ところが、次のように書き直されたものの方が、今好んで読まれています。

「町の人たちは、死んでいる少女のまわりに集まってきました。女の子のかけよって、『私があの時、マツチを買ってやればよかったんだ』と涙を流して少女を抱きしめました。町の人たちは、それから、貧しい人々を大切にやさしい人になりました」

こういう風に結論や解釈が与えら

れ、小学校にも入らないころの私は、ずいぶん長い間、ふと思い出しては胸を痛めていたことを覚えています。最近になって、姉妹が問一髪で上着を全部編み上げ、兄達は皆、白鳥から王子に戻って、めでたしめでたし……と終わっている絵本に出会いました。この違いは何なのだろうと考える前に、もう一つ別の例をあげてみましょう。

子ども達と一緒に「べっかんこオニ」というお芝居を観たことがありました。この芝居の最後は、「べっかんこオニは愛するユキの目を開けるために花を採りにいつて、ユキを捜していたユキの父親に撃たれて死んでしまい、その死を目の前で見たユキは、そのまま鬼と化して雪の中で舞う……」というシーンでした。

お芝居が終わった後、悲痛な顔で黙って歩く子ども達に、私も黙って帰路につきました。しばらくして子ども達は、ボツリボツリと言いはじめました。

「私だったら、山んばばさまにたのんでみるけど……」

「ユキの目をあけたあの草の汁を飲ませたら生き返らんやろか」……

子どもたちはあまりにも悲しい結末に對峙し、まるで氷のかたまりを胸に抱いてしまったような気もちに

なってしまうと、読者の心は乱れません。原作のように心さいなまれることもなく、読者という第三者のまま受身で終わることが可能になります。そう、物事に第三者的にしか関わらず、受身でしか動こうとしない子どもたちがつくられてゆく……

昔話の中には、アンハッピーエンドやオープンエンド(結論を提示してしまわない終わり方)を通して、読者に人生の波を自分でのりこえてゆく力を育てる機能をもったものがある、と私には思えるのです。

私たちは、きちんと表現して伝え、正しい結論に導くことが子育てであり、教育であると思ひこみすぎているように思います。そのために昔話が本来もっている人生への「力」をそこなうような書きかえがあちこちで見られるような気がするのです。

昔話はもつと深く人生を語り、人生を支えているもののように思えます。子どもとともに、親自身も本来の昔話のそんな「力」の中に身をゆだねて、ただよつてみてください。きっと、心ふるえ、心動き、心さわぐ、そんな体験を、もう一度新鮮に味わい直せるはずです。子育ては、親育ちでもあるのですから……

*筆者は銀塚こども劇場の運営委員長でもあります。この舞台は、子ども劇場の例会として観たものです。

やっかいもの万歳！

「ちよろりととつけー」は、届くなり我が家の人気ものになった本の一つです。これは、とかげの兄弟の物語で、はじめて一人旅に出る兄のちよろりに、弟のとつけーがこっそりついてきてしまったことから、いろいろ困ったことが起こりますが、最後には無事目的地のいとこの家にとどりつくというお話です。

長男（小四）、長女（小三）と次男（四歳）の関係が、まさにちよろりととつけーのようだと思うのか、名前を自分たちの名におきかえて読んでとせがむこともありました。

ところが、この「ちよろりととつけー」の中の、弟の「とつけー」をどうみるかは、三人三様で、とても興味深いものでした。

日常生活の中で、まさに「とつけー」にあたる（上の子のまねをしたがり、一緒にできるといいながら上の子にめんどうをかけ、結局足手まといになる）次男は、こともなげに「とつけーがついてこなかったらよ

かったのにね」と言い、兄や姉の失笑を買っていました。

ちよつと理屈っぽい長男は、「それはそうだけど、そうになると、このお話、ほとんどなくなっちゃって、本にならないよ。だからやっぱ、要るんだよ」と分析します。

いつも次男のめんどうをみる役回りの長女は、「私は、よくわかんないけど、やっぱりとつけーはついてきてよかったって気がする。ついてこなかったらだめだってかんじがある」と言います。

この子たちが、意識の底で「やっぱりとつけーは要る」と感じていることは、とても意味深く私の胸にひびきました。

中

このやりとりを聞いていて、私はあることを思い出しました。これは保母をしている教子さんから相談を受けたでき事なのですが……

その保母の勤めている園に三人兄



「ちよろりととつけー」より

もを育ててつくづく思います。このようなお母さんの行為が、そのままこの子たちの生き方につながってゆき、この子たちが大きくなった時、自分の楽しみや自分の生活、自分の出世にとつてじやまなもの（その頃には、このお母さん自身が年をとって、その「じやまな存在」になっているかもしれない）は、よそにあずけるか、排除するかしようとしても、それは不思議ではありません。母親がしたことそのまま踏襲しているだけのことで……

中

でも、「じやまな存在」って、一体何でしょう。お話の中には、この「じやまな存在」や「やっかいもの」や「悪者」が登場しなければ、そもそもそのお話が成り立たないものがたくさんあります。「かにむかし」「うりひめとあまんじやく」「おかみと七ひきのこやぎ」「二ひきのやぎのがらがらどん」など、例をあげればきりがありません。

我が家の長男は「それがなければお話が成り立たないから必要」と言い、長女は「やっぱりなかったらだめ」と言います。これをヒントに私はこう考えました。「お話」を「人生」としたら、「やっかいもの」や「悪者」は、「人生の中でのりこえ

弟が通っていたそうです。ある夏の日、その子たちはめずらしく父親の車で登園し、いちばん下の子だけ園にあずけると、海水浴に出かけたというのです。その時、母親は「下の子がいると上の子が、がまんして下の子に合わせないといけませんので、今日は上の子だけ思う存分遊ばせてやりたいと思います」と言っていたそうです。その保母は「何か、間違っているって気がするんですが……」と考えこんでいました。

おいていかれた下の子の心の傷も気になりますが、私がもっと危惧するのは、上の二人の子どものことです。つまり、自分たちが思いきり楽しめるようにと母親が下の子だけを保育園にあずけたというようなことを通して、この子たちは、「自分が



なければならぬ壁」ということにはなるのではないかと。子どもたちは絵本の中で「やっかいもの」や「悪者」にくり返し出会うことを通して、「人生に壁は必ずあるもので、それはないへんだけれど、のりこえなければならぬもの。そして、努力すれば必ずのりこえられるもの」という人生のイメージトレーニングをしているのかもしれない……

絵本は、もちろんこんな風なことばで人生を語りはしませんけれど、とても大切な人生の見方を、人生へのメッセージを、常に子どもたちの心の中に吹きこみつけているように思います。そしてその中で「やっかいもの」や「悪者」は嫌われながらも「なくてはならないもの」として、健在であり続けているのです。

☆「ちよろりととつけー」 隆夫なな作（こどものとも唱号・福音館書店刊／現在品切れ）

☆「かにむかし」 木下順二文／清水巖絵（岩波書店刊）

☆「うりひめとあまんじやく」 稲田和子再話／小西英子画（こどものとも唱号）

☆「おかみと七ひきのこやぎ」 クリム童話／ホフマン絵／瀬田貞二訳

☆「二ひきのやぎのがらがらどん」 北政民話／アラウン絵／瀬田貞二訳

（以上福音館書店刊）

絵本貯金のすすめ

私たちは何を基準に絵本を選んでいくのでしょうか。書評、絵本の講演会などのおすすめ、書店のパンフレット、新聞広告、口コミ……たくさんあるのヒントはあるのですが、選ぶのは自分自身ですから、自分自身の選ぶ力が育つてゆくことが、良い絵本を選ぶための第一条件といえます。

私は、幼児教育学科の一年生の早い時期に絵本の講義をします。そこで、良い本とはどういう本かを話し、また素敵な絵本たちを紹介する一方で、私は「絵本貯金」をすすめます。それは、①毎月決まった金額（五百円位）を絵本のためのお金と決める。②毎月一回（半日位かけて）本屋に行き、そこにある絵本の中から一冊だけいちばん気に入った絵本を買う、というだけのことで、③予定額で買えなかった時は一カ月待って、一カ月分ためて買う。④何冊か気に入った本があっても一冊だけにしぼる……という限定がつきます。

金額を限ることは、どうしてもほ

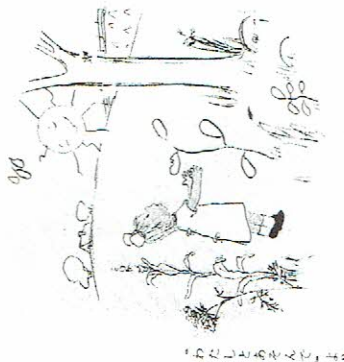
しいものは、一カ月先にのぼしてでも、どうしてもほしい……という体験をするためのものだし、一冊に限ることは、たくさん絵本の中からしぼっていった教訓から、さらに一冊だけを選び出す作業の中で、「自分にとってどうしても捨てがたいもの」に出会うためのものです。今は絵本飽食時代とでもいいたくなるほど、絵本が氾濫している時代といえます。その中で絵本を選ぶ目を育てるには、自分の心を何らかの形で「追いつめ」、飢餓状態に置くことが必要だというのが私の考えです。

「一冊にしぼるのに二時間かかってしまった」という学生がいました。彼女は『わたしとあそんで』を選んだのですが、「本屋ではじめて見た時も、選んだあとも、どこがどう良い、と言えないのに、この本を持った手をどうしても離せない。別の本を手にし、どれにしようかと迷ううちにやはりこの本を手にとってい

る。でも……あまりきれいでないし……とまた置いてみるが、いつの間にかまたこの本をもち上げてしまう……。自分にとって不思議な魅力のある大切な本です」と、紹介してくれました。

こういう過程を経て手に入れた本は、本当に宝物となるでしょうし、このことを通してこの学生は自分の中に絵本を見る目を確実に成長させたと思えるのです。

「ひと月に一冊……その時いちばん気に入った絵本を買う。それを二年間読めたら、きつとあなたの本棚には二十冊近いあなたのお気に入りの絵本が並ぶでしょう。それはあなたが自分の力で手に入れたあなたの一生の宝物です」と、学生には話しますが、子育て真っ最中のお母さんたちが、毎月その時間をもつのは大変です。でも、年に一回（誕生日



のプレゼントとして、御主人に子どものことをたのんで）じつくりと絵本コーナーで過ごす日をもってみてください。そして一冊だけ（一冊にしぼる過程が大切です）絵本を選んでみてください。一年に一冊、それが十年たったら十冊……それはきつとすばらしい人生の宝物になると思うのです。

絵本の講義から一年近くたったころ、授業の中で「おすすめ絵本の会」をします。これは一人一人の学生が、この一年間で集めてきた絵本の中からさらに一冊だけ選んで、みんなの前で紹介する時間です。

今のところ、選ばれる絵本のベスト・スリーは『しろいうさぎとくろいうさぎ』『てぶくろ』『ぐりとぐら』シリーズです。

『しろいうさぎとくろいうさぎ』がよく選ばれるのは、十八・十九歳の女子学生が多いことも影響しているかなと思いますが、これをきっかけ



「てぶくろ」より

に「絵本は子どもだけのためにあるんじゃない」と実感する学生が多いようです。『てぶくろ』はあの手この手で、どんどん入ってしまう不思議さがとにかく心をとらえ、「小さいころから好きなお話でした」と言いつて選ばれますし、『ぐりとぐら』も「小さい時、大好きでよく読んでもらった」「保育園にあつて、好きだった」等の理由が多く、小さい時読んでもらった思い出が、ずいぶん深く残っていることを改めて思います。

私の知らなかった素敵な本に出会えるのもこの時です。

『ずつとずつとだいすきだよ』『おかあさん』『ど・ど・ど・ど・ど』など、今年もたくさん知りました。

「小さいころ、よく読んだ本です」「はじめて買ってもらった本がこのお話でした」「小さいころこのお話が好きでしたが題がわからず、スト

ーリーを母や姉に話して、探し回ってやっとわかりました。出会えた時は本当にうれしくて、絵本に抱きついてしまいました。——このおすすめ絵本の会をして、つくづく、小さい時に読んでもらった記憶は二十年近く経っても鮮明に残っているものだなあと思われます。そして同じ本に出会った時、そのころ感じた気持ちも同時によみがえってくるのが報告されています。

今、あなたのひざでじつとお話をきいているこの体験が、二十年後、その子が同じ本に出会った時に、その子の心によみがえってくるのだ……と思うと、今のこの一瞬は、今、大切だという以上に、人生にとって貴重なものに思えてくるのですが、いかがですか？

- ☆『わたしとあそんで』エッツ文・絵／田中一朗
- ☆『しろいうさぎとくろいうさぎ』カース・ウィリアムズ文・絵／松岡享子訳
- ☆『てぶくろ』ウクライナ民話／ラチャ・絵／内田利彦子訳
- ☆『ぐりとぐら』中川孝枝子文／大村百合子絵（以上福音館書店刊）
- ☆『おかあさん』瀬戸昌子文・絵（ポプラ社刊）
- ☆『ずつとずつとだいすきだよ』ウィルヘルム文・絵／久山未市訳（評論社刊）
- ☆『ど・ど・ど・ど・ど』赤坂三郎作・絵（金の星社刊）

その気になって……

本を読んでもらう時、子どもの心の中で本の主人公が生き生きと生命を持ち、躍動していることは言うまでもありませんが、本を読んでもらったあと、今度は子どもたちが主人公になりきって、本の中で出会ったことを再現してみようと「ごっこあそび」をすることも少なくありません。

我が家の子どもたちがいちばんくり返し真似たのは『マトリョーシカちゃん』と『ぶたぶたくんのおかいもの』でした。

長男はマトリョーシカ人形の真似をして、お父さんのTシャツに頭をつっこみ、自分のTシャツにむりやり妹の頭をおしこんで「マトリョーシカちゃんの中からターシャちゃんが出てきましたー!」と言いなから次々と出てきてはまた入り……。ただTシャツから出たり入ったりするだけのことが、そんなに面白いのかしらと思う位、くり返していました。

『ぶたぶたくんのおかいもの』では、かいものかごを手にさげて「ぶたぶた……!」と言いなから歩き回り、母親演ずる「パンやおじさん」や「やおやのおねえさん」「おかしやおばあさん」相手に、かいものごっこ。同じセリフのくり返しなのに何度もくり返し相手をさせられ、しまいに「かごを隠そうか」と思ったほどでした。

していることはTシャツからの出入りであり、かいものごっこなのですが、子どもはマトリョーシカちゃんに、ぶたぶたくんになりきっている……。だからこそ、くり返し何度も楽しめるのだと思いました。

子どもは「その気になる」天才です。本気で信じこみ、本気で主人公になりきってあそびます。そして、その「ごっこあそび」は、本やお話が基礎になった時、驚くほど持続し、広がりをもつてくることは、本をよく読んであげておられるお母さんや

保母さんはきつとご存知のことでしょう。

本は「イメージの世界」を広げます。それが子どもの「その気になる力」を広げているのです。「本気で、その気になった」時、子どもはその体験を「自分のもの」にできるのだし、「その気になる」ためには、心の中に「イメージの世界」が広がっていることが大切なのです。

例えば、保育園で同じように綱引きをするにも、「綱の引っぱりごっこ、どっちが勝つか」という設定で引っぱり合いをさせるより、「ぼくたちの大好きなすく素敵なお星さまを作ろうよ」と、ダンボールか何かを子どもたちと一緒に飾りたてて作っておいて、そこに「そのお星さま、よこせ!」と誰かが奪いにきて取り合いになったら、お星さまをめぐるその敵との引っぱり合いは、子どもたちにとって「本気の、その気になった」ものになるし、だからこそ、体の底から思い切り力をふりしぼる体験ができるわけです。それは引っぱり合っているものが「大好き

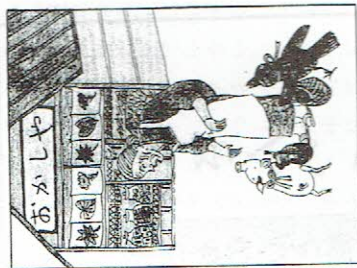


『マトリョーシカちゃん』より

なお星さま」のイメージを担い、相手が「お星さまを取りにきた敵」のイメージを担っているからなのです。

こう考えると、物事に本気になれることと、心の中に豊かなイメージの世界をもつこととが、大変密接な関係で支え合っていることがわかります。私たち親は、とかく現実認識の力や現実の物事をこなしていく力を重要視して、心の中に豊かなイメージの世界をもつことが、生きてゆく上でどれほど大切なものかに気づかないことがあります。しかし、子どもたちを見ていると、豊かなイメージに裏付けされた行動がいちばん生き生きと力強く、また役立つものであり、逆に現実の行動だけを指示された時、子どもはやる気も楽しみも失っていくのです。

「いつまでも夢みないことを信じていないで……!」なんて言わないでください。夢のなくなった子どもたちは、未来にむかって歩もうとしな



『ぶたぶたくんのおかいもの』より

くなります。夢にとつぷりつかつて生きている幼児期をより豊かに、そして生き生きとイメージの躍動する心を大切に……と願います。

私の帰りが少し遅れて、長女が先に家に帰っていて家の戸が開かないことがありました。門の所で長女の叫び声を聞いた私はびっくりしました。長女は「お家さん! ひろこだよ! わからないの? 開けてよ!」と家にむかつて叫んでいるのです。小学校三年生にもなつて、家が生きものでないことくらい知らないわけではなからうけれど、その時の娘は、「自分を受け入れ、守ってくれるもの」として、家に「生命」を感じていたのだらうと思います。私たちが家を建てる時も、建物としての家の物理的な機能のほかに、やはり「私たちを受け入れ、守ってくれるもの」という要素もまた家に求めているのではないかと思うと、子どももおとなも本当は「イメージの中で」生きているのではないかと考えてくるのです。

「おおかみと七ひきのこやぎ」をはじめ読んでもらった時、私は未づ子のやぎが逃げこんだ大きな柱時計がとてもし印象に残りました。大きな柱時計さえあれば、どんな危険がや

つてきても大丈夫……大きな柱時計がほしい……。この思いが私の心の奥底にずっと息づいていたことに気付いたのは、今増築中の部屋におく時計のことを考えた時でした。私は「床に置く大きな柱時計、あの七ひきのこやぎの……!」と思い、その瞬間に「あ、そうだ。私はずっとそれか置きたかつたんだ!」と思い出したのです。四十年近く経つてやつとかなう夢……。もう私はその中に隠れられないし、娘がこないことも知っているし、その中に隠れれば何事からも守られるなんてはずはないことも知っているけれど、私の心の中では、やはり大きな柱時計は、私を守ってくれるものとして、とてつもなく大きな安らぎを与えてくれるのです。

どうぞ絵本を読んだら、その主人公になりきつて、子どもと一緒に、「その気になる」ことを楽しんでみてください。イメージの世界にあそぶことは、読むこと以上に子どもの心を豊かにし、さらにイメージの世界と現実の自分をつなげてくれる楽しい営みなのです。

☆『マトリョーシカちゃん』加古里子ぶん・え(福音館書店刊)

☆『ぶたぶたくんのおかいもの』土方久功きく・え(福音館書店刊)

サンタさんって……

「お母さん、白いドレスあした学校にもっていつていい？」

小三の娘が必死の面持ちできいてきました。白いドレスとは、一年前サンタさんにもらったサンタさんの国の女の子が着るドレスで、まっ白のロングドレスに金のリボンがついたものです。

「私のクラスのAちゃんがね、サンタさんなんてウソで、お父さんとお母さんが買ってるんだって言うの。Aちゃんが、クーパーペンシルがほしいって言った時、スーパーでお母さんが買ってるの見たやっただって。だから私のドレスもきつとそうにちがいないって言うんだけど、ちがうよね。こんなの絶対日本じゃ売ってないよね！ そう言ったら『じゃあ、もつてきて見せてよ』って言われたの……」

娘はいかにも不服気に口をとがらせていました。

私は、「もつていつてもいいけれど、サンタさんは、サンタさんを信じて

いる子どものところにしか来ないから、Aちゃんのところに来なくて、それでお母さんが買ってたのかもしれないよ。だから、あんまり私のはサンタさんがくれたんだもんって言うのと、Aちゃんが悲しくなるかもしれないから、気をつけてね」と言いました。

その日の夕方、娘は「Aちゃんに見せたらね、あつ、ほんとだ！」って言うてたよ」と、うれしそうに報告してくれました。

我が家では（恩師、河合集雄先生のお宅にならって）サンタさんがプレゼントを家の中のどこかにかくしてゆきます。子どもたちの枕元に下げられたくつしたの中には、そのプレゼントの包み紙の切れはしや、ヒントを書いた紙だけが入っていて、子どもたちはそれを見て、家捜しをしなければなりません。クリスマスの朝は、子どもたちが五時前からとび起きて、家中の戸だなや押し入れ、

イスのうしろや机の下、引き出しの中を捜し回るので、その音で目がさめてしまいます。長男はある年、「いつもサンタさんは、プレゼントをかくしてずるいから、僕もくつしたを見つかりにくいところに下げよう」と言って、かくし場所を捜しながら、ふと気がついて「でも、見つからなくてヒントが入れないから、プレゼントやめようと思われたら困るしな……」。このへんなら見つかりにくいけど見つかるくらいかな」などと、サンタさんとのかけひきを楽しむこともありました。

長男が二年、長女が一年の時、二人で「サンタさんを見よう」と、コソコソ相談していました。寢床に入つてしばらくして二人は細いひもで親指同士を結び、クイッククイックとひっぱっては「起きてる？」「起きてるよ」と合図をしはじめました。お互いに眠ってしまわないように注意しあうつもりの方でした。ところが三十分もすると妹の方が不機嫌になってきて、兄がクイックとひっぱつ



て「起きてる？」ときくと、「ちやんと起きてるからそんなにひっぱらないでよ。もう痛いからはずすよ！」「でも、寝ないでよ」「わかってるって。うるさいなあ、黙っててよ！」

ひもをはずして黙ってしまふと何分もしないうちに寝息がきこえてきて、もしそのやりとりをサンタさんが聞いていたら、いつ眠ったかがすぐわかっただろうと思いました。次の朝、やはり五時前に目ざめた二人は「あつ、やっぱり眠っちゃった！」とあわててくつしたの中からヒントをとり出していました。

次の年は「サンタさんを見るためにいちばんいいのはサンタさんがくつしたにヒントを入れる時だから、くつしたを枕元に下げておくと僕のすぐそばまで来るわけで、眠ってないとすぐバレしてしまう。だからくつしたをへやの反対側に下げて、僕はふとんの中で寝たふりをしていれば、きつと僕が寝てしまっていると思つてヒントをくつしたにいれるだろう」と考えて、そうしていました。しかし、寝たふり。はむずかしいもので、本人が「全く寝ていない」と言うにもかかわらず、サンタさんは見られず、しかもヒントはくつしたの中にちやんと入っていたのです。

子どもたちが今年どんなワナをしかけてくるのか、サンタさんがど

んな風にしてそれをクリアするのか本当に楽しみです。

子どもたちは本当にサンタさんが大好きです。最も好きな絵本にサンタさんの絵本をあげる子どもも多くいます。「ぐりとぐらのおきやくさま」「まどから おくりもの」「サンタさんからきたてがみ」「あのね、サンタの国ではね……」等々……。それはプレゼントをくれるからだけではなく、目に見えないものを信じる心のすばらしさを教えてくれるから（「サンタクロースついでるんではないか」）でもあります。

そう考えると、最近の「クリスマスプレゼントに……」というおもらや屋の広告や「クリスマスプレゼントを買ってやろう」という大人のことはなどが、サンタクロースを信じている子どもの心を時として損つてしまうことがあることに、気づいてほしいものです。

サンタさんを信じていた子どもが学校で友だちから「サンタさんなんてウソよ。プレゼントくれるのはお父さんよ」と言われて、「ホントはお父さんなんじゃないか？」と言いはじめることがあります。しかし、白いドレスを「あつ、ほんとだ」と言った娘の友人をみてもわかるように「サンタさんなんてウソよ」と言っ

ていた子どもが全くサンタさんを信じていないかという点、そうではないのです。サンタさんを疑いはじめた子どもを「サンタさんなんてウソ」という方向にもつていつてしまうのは、実は「ああ、もううちの子はサンタさんを信じなくなつてしまった」と思いこんでしまう親の方なのではないかと思ひます。「あつ、ほんとだ」と言ったAちゃんは、やはり、「信じてつづけていたかった」のだと思います。

見えないものを信じる心は、人のやさしさを、人の暖かさを、人の思いやりを信じる心につながつてゆくのだと思つた時、子どもたちがサンタさんを疑いはじめたその時に、私たち親は、どんなことばをかけてあげられるのか……季節柄、そんなことも考えてみると面白いかもしれませんね。

- ☆『ぐりとぐらのおきやくさま』中川李枝子文／山崎百合子絵（福音館書店刊）
- ☆『まどから おくりもの』五味太郎作・絵（偕成社刊）
- ☆『サンタさんからきたてがみ』たんのゆき子作／垂石真子絵（福音館書店刊）
- ☆『あのね、サンタの国ではね……』嘉納純子文／黒井健絵（偕成社刊）
- ☆『サンタクロースついでるんではないか』ニューヨーク サン新聞社社説／中村妙子訳／東進子絵（偕成社刊）

うれしくなる絵本

絵本について語る時、「いい絵本」「おもしろい絵本」というとらえ方がまず頭に浮かびますが、私はそれに「うれしくなる絵本」というのを加えたいと思います。それは中身のたのしいお話であるとか、絵がたのしそであるということではありません。そこに「あそび心」と「発見の喜び」があるもの、そんな絵本が私たちに「うれしく」させてくれるのです。

私が「発見の喜び」を最初に知ったのは「はつばのおうち」でした。小さな女の子が、庭であそんでいて、雨が降ってきたので「はつばのおうち」に雨やどりします。するとそこに昆虫たちが次々と雨やどりにやってくるのですが、女の子の周りの何種類かの葉の上の水滴が、ページを追うに従って変化してゆくだけでなく、絵の片隅に、はじめは見えなかつたくもの巣が、水滴がついてまるで真珠の首かざりのようにつながってゆくに連れ、次第に姿を現わして

くるのです。はじめは文を読み、二度目は絵を見て、昆虫の動きを追って、そして何回目かにくもの巣の妙を発見した時は「おもしろい！」を繰り返して、ほんとに「うれしくなつてしまった」ものでした。

まず画家が提供してくれるこんな「うれしくなつてしまうような」あそび心からみてみましょう。

『きよだいな きよだいな』『やつてきました』『ぼくのいもうとひろこちゃん』の絵の中には、文章ではひとつも出てこない脇役が、一貫して登場してきています。

『きよだいな きよだいな』の中の子ぎつね、『やつてきました』のてんとう虫、『ぼくのいもうとひろこちゃん』の黒ねこ。いわばストーリーとは関係なく、それが居なくてもお話に支障はないそれぞれの脇役が、いざ絵本になつて子どもに提出されると、生き生きと子どもたちの心をとらえるのに出会います。これらの脇役には、たいてい大人より先に子

どもが気づきます。子どもたちは大人よりずっと「あそび心」と「発見の喜び」に開かれているし、発見あそびが好きです。

中

「発見の喜び」を意図した「しかけ絵本」もありますが、こうなると画家の「あそび心」というより、「しかけ」とのかけひきになつてしまい、当てものごつこ的ななつてしまいます。『おつとおとしもの』などは、その両方を備えているように思えるのですが……。男の子が自分の落とし物トラックの後ろ半分を捜し歩くうち、やはり捜しものをしているいく人かの人から尋ねられます。その人たちの捜しものは、そこまでのページに出てきているわけです。そしてやつと交番でトラックを見つけます。ここまではしかけを解く形ですむのですが、我が家の子どもたちはここで、交番の入口の貼り紙にある「ま

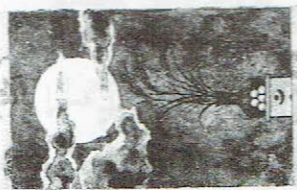


「はつばのおうち」より

いこ猫」が、前の方のページに居たことを見つけ出します。大人は、交番らしさを示す貼り紙としか思わなかつたこの貼り紙を、子どもたちはすぐさま「発見あそび」にむすびつけます。それは、子どもたちが、その絵本の中の世界に「本気で」住んでいるからだし、絵本の中にも、現実の世界と同じ整合性を求めている面があるからだだと思います。

中

文章にないことまで発見する以上に、文章にあることはどんな小さなことでも絵の中に発見しようとしまふ。たくさんの群衆が描いてあつても、その中に主人公やそれまでの登場人物をみつけようとするし（この心性に合わせた人探し絵本「ウォーリーシリーズ」は高い人気を示しています）、「きいろいすヨッキのぼく……」「わたしは手をふつて……」などどこに書いてあれば、そのセリフにあてはまる人の姿を群衆の中から見つけようとしまふ。そして、そこまでこころ配って描かれていると



「たあんき ぼおんき たんころりん」より

子どもたちは大喜びです。（そうではないとその絵本は、あまり手にとられなくなります）

そんなことは、本の筋とは関係のないことで、重要なことではないのかもしれないが、そんなあそび心や発見の喜びは、きつと大きくなつてからも、その人の心の中に生き続けていくと思うのです。

『しんぶんしであそぶ』の絵の中にある新聞に載っている小さな新聞記事の社会風刺やブラックユーモアをみつけ出しては楽しんで読んだのは、子どもたちより親たちだったのではないのでしょうか。

中

絵だけではなく、ことばの「あそび心」と「発見の喜び」は「ことばあそびうた」に代表されます。マザーグースなどは英語では「あそび心」と「発見の喜び」に満ちていても、訳文でそれを感じるのはいかなりむずかしいようです。日本でもそれに匹敵する「ことばあそび」が出たと思つたのが、『たあんき ぼおんき たんころりん』でした。我が家の子どもたちはすぐさま、何度も、何日も読み続け、声をそろえて唱和して楽しんでいました。この本の最後の数ページはまた、画家のあそび心にも満ちあふれています。「おだんこと

うぞ おつとまふ」のあと、一つ風つた三方のおだんこと、小さなふくらみがくつたお月さま。そして裏表紙は、もう三方の上におだんことはなく、子タヌキたちがお月さまにむかつてススキを振り上げて、「おだんこと返してえ！」という声がきこえるよう……。親子で黙つて目と目で、ク・ク・クと笑い合つてしまうような……。

あそび心に親も子も、ゆつたり浸れる「うれしくなるような絵本」との出会い。今の忙しい子どもたちにもそんなゆつたりしたひとときを……と願います。

- ☆「はつばのおうち」 征矢清作／林明子 絵
- ☆「きよだいな きよだいな」 長谷川真子 作／篠矢なな絵（こどものとも 28号・現在品切れ）
- ☆「やつてきました」 内田賢太郎作／かわむらふゆな絵（年少版こどものとも 10号・現在品切れ）
- ☆「ぼくのいもうとひろこちゃん」 山田真理子作／織茂泰子 絵（年少版こどものとも 10号）
- ☆「おつとおとしもの」 五味太郎作（こどものとも 年中向き、88年1月号・現在品切れ）
- ☆「しんぶんしでつくろう」 よしだきみま 作（かかくのとも 31号・現在品切れ）
- ☆「ことばあそびうた」 谷川俊太郎詩／瀬川康男 絵
- ☆「たあんき ぼおんき たんころりん」 長谷川真子文／篠矢なな 絵（こどものとも 28号・現在品切れ）

（以上福音館書店刊）

未っ子ばかりがなぜ……

昔話の中では、よく三人兄弟や三人姉妹が出てきますが、上の二人は悪役で、未の弟や妹をいじめめる形で登場し、未っ子の方は、はじめはバカにされたり、さげすまれたりしているにもかかわらず、最後は幸せになるという筋立てが多いようです。例えば、イギリスの昔話の「三びきのこぶた」、グリムの昔話の「灰かぶり（シンデレラ）」、ロシアの昔話の「魔法の馬」など、数え上げればきりがありません。私が長女だからかもしれないですが、このような筋立てが不公平に思え、どうしてこういう話が多いのだろうとずっと心にひっかかっていた。

私が大学でカウンセラーになる勉強をしていたころでした。カウンセラーになるためには自分自身を知ること重要な学習過程の一つになりますが、その中で、次第に自分の嫌な面に気づき、自分が嫌になってきて、こんな私らしくない、こんな私、嫌だ、切り捨ててしまいた

い、と言いだしたことがありました。そのとき、先輩カウンセラーに、こう言われたのです。

「でも、それも君の一部だよ。だったら、ほかの誰もが君らしくないと思っても、君だけは『こういう私も私なのよ』と、その自分を認めてやらなくちゃ、その君の一部がかわいそうじゃないか。その自分を切り捨ててしまった自分なんて、本当の自分じゃないだろう？」

その言葉によって、私はそれまで「自分らしくあろう」とし、「自分らしくない自分を変えよう、押し殺そう、切り捨てよう」としていた自分からぶつと解放されて、本当にホッとし、安心して生きられる気がしたのでした。そして、昔話と心とのつながりを学ぶにつれ、兄弟姉妹のあの不公平さの語るものがみえてきました。あの兄弟姉妹は、自分自身が心の中に抱えている「自分」に対するイメージの間の上下関係ということなのではないだろうかと思えて

の中の欠点や自分の中の隠したい部分、見せたくない部分こそ、自分をより幸せにする鍵があるんだという事になりはしないでしょうか。未っ子ばかりが最後はうまくいくお話は、自分の中の未っ子を大切にしているということなのかもしれない。

◆

そしてまた、この昔話の三人兄弟のあり方は、私たちに自分自身の心の中にこの構造を見出させるだけでなく、わが子を育てるとき、一、こいつあつてほしいと願う姿に合う面、二、こういう姿もあると認められる面、三、こいつあつてはしくないと思いう面、を三人兄弟に見立てて考えてみることもできます。



「魔法の馬」(ロシア昔話、福音館書店刊)より

わが家の息子も、一(心の中の良男)本が好きでよく読み、物知りです。二(心の中の二番目)運動も好きで木登りが得意です。三(心の中の未っ子)でも、のんびりゆっくりで何事にも人一倍時間がかかります。この第三番目の特徴を「心の中の未っ子」なんだと考えてみることでこの「こいつあつてはしくないと認められる面」の大切さが見えてきて、親が、自分の思い通りの「良い子」に子どもをつくりかえようとする欲求から、少し自由になることができるように思います。また、この未っ子部分が、いつか、しっかりと認められ、その良さを大切にしてくれ、尊重してくれる人が見つかったとき、彼は本当に自分の人生をつかめるのかもしれないと思うのです。だとしたら、あのシンデレラに馬車を与え、王子様のもとへ連れて行った魔法使いのおばあさんに、つまり、欠点に見えるその子の側面を、その子が生まれかわるきっかけに変える力を与えることの



「魔法の馬」(ロシア昔話、福音館書店刊)より

きたのです。

◆

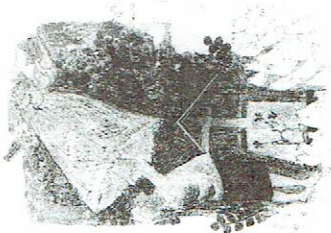
そのことを「シンデレラ」を例にとつて少し具体的にお話してみよう。

シンデレラのいちばん上の姉はこつ慢で自信家でシンデレラをさげすんでいます。これは、例えば私の心の中の「いちばん私らしいと思っている一面」が、他の面に対して「私がいちばんこの人のお気に入りなのよ」と大きな顔をし、他の面をさげすんでいることと重なります。

二番目の姉は「私には、こんな面もあるのね」というくらいは私が認めている部分です。

ところが、三番目のシンデレラになると、うす汚くて、人前に出すのなんか恥ずかしくて、台所に押し隠しておきたいような存在(そんな私の一部分)なのです。

でも、お話の中では、そのシンデレラが王子様と結ばれて、めでたしめでたしとなるわけですから、自分



「灰かぶり」(グリムの昔話、福音館書店刊)より

である人に、私だから認められたいなどと思うのです。そのためには、まずその子の心の中の未っ子部分(欠点に見える一面)も、その子の可能性として大切にしていけることができる親になることですね。

◆

この未っ子が、最後は王様やお姫様、長者や金持ちになるということもまた、心の中のこととして考えてみましょう。

王様とは、その国の支配者であり指導者であるということですから、王になるとは、自分の心のコントロールをきちんとできるようになり、自分の心の全体を自分のものにするということになるでしょう。また長者、金持ちになるということは、心の中の富(能力や資質)が、自分の力として使えるものとなるということになるのではないかと思います。そして、その道は自分の心の中の未っ子部分を、押し隠したり、切り捨てたりするのではなく、むしろ受け入れることから開かれてくることは、心病んだ人たちの治療過程に多く見られるところでもあるのです。

あなたの、そしてお子さんの心の中の未っ子を、大切に見守る目を持つきっかけに、もういちど、三人兄弟(姉妹)のお話を、ひもといてみませんか。

文化は心の衣食住

連載をはじめから、絵本についての講演をたのまれることが増えました。そして、絵本についてお話ししておりますと、「絵本なんか読んでやらなくても子どもは育ちます……」という言葉をよく聞きます。絵本ばかりでなく、文化とよばれるもののほとんどが、そんなものなんでしょう。絵でも音楽でも芝居でも、伝統文化とよばれる踊りや太鼓なども、祭りや行事さえも……。しかし私たちは子どもが育つ過程において、こういったものの出会いがその子の心の発達を大きく左右することも見えています。そこで私は、文化と心の関係を、「文化は心の衣食住」というキーワードでお話しすることになっています。

文化とは、心を包むものであり、心の栄養であり、心住まうところであり、それが欠けたとき、衣食は足

りても礼節を失っていたり、衣食住は整っても心の病は増えていたりということがおこるように思われるのです。

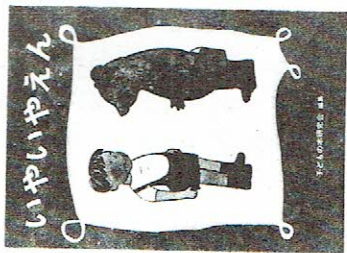
「衣」心の衣がうまくまとえず、いわばむきだし心を持って余して、苦しんでいる子どもたち、逆に幾重にも固く着込んでしまつて、いつ、どう脱いだら良いか分からず、まるでよいを着たようにカラの中の自分が見えなくなつてしまつた子どもたち……。そのような子どもたちを見てみると、成長過程で様々な文化との出会いによって、自分にまとえる様々な衣を（様々な自分のあり方を）体験できたよかつたのに思えます。そして、子どもに衣服を与えるときの体験から、私たちが子どもに与える文化も、華美に見えてくればかりがよいものでなく、何度も繰り返し返して楽しむことができ、身近でなじみやすいもの（絵本はその一つだと思います）を日常的に与えることの大切さを感じるのです。

「食」心の栄養が充分でなく何でも独り占めし、自分を取り入れることしか考えられない子どもたちや、逆に飽食してしまつて、より強い刺激を追い求める子どもたちにも出会います。

私たちは、食事を考えるとき、いくら子どもが好むからといって、おやつや甘いものばかりでは子どもは育たないことを知っているし、いくら栄養があつて体のために良いからといって、味もそつけない同じようなものばかりを与えては、子どもが楽しんで育たないことも知っています。

テレビ、マンガ、ファミコンなどがあふれる中で、子どもに与えるおやつと食事のバランスを知っている私たちは、文化についても、子どもが好むものと親が与えたいものとのバランスを考えることができるでしょう。

「住」家が建物として立派であることよりも、家庭として団らんのあることの大切さはいくらでもありま

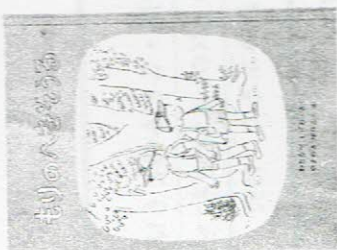


せん、心の住まいたる文化も、どんな立派なものであっても、子どもがひとりぼっちでそれに触れるのでは、心の潤いに結びつきにくいのです。つまり、子が親とともに、そして友人とともに、そのおなじ文化に出会うことの大切さ、私たちは知っているのです。

「文化は心の衣食住」この言葉を絵本や本を選ぶときも、読んであげるときも、ふと思ひ出していただけたらうれしく思います。

第一回に「子どもがはじめて出会う絵本」というテーマで書きましたが、最終回の今回は、絵本を卒業していくころのことをお話ししておわりにしましょう。

絵本は子どもだけのものではありませんから、おとなになつても絵本との出会いはもちろん楽しいのですが、絵本の読みきかせという点から見ると、五、六歳で絵本から童話への転換点が訪れるように思います。



大抵の行っている保育園で、絵本の貸し出し係をしてくれているのですが、年長になると、めつかり「字のいっぱいある本」を借りる率が高くなるのです。「いよいよやえん」もりのへなそうる、森おぼけ、たんたのたんけん」などが、絵本から童話への橋渡しをしてくれます。

「字の多い絵本」から「字ばかりの本」になつてもまだ読みきかせの時期はつづきます。小学校に入ると、当然文字は読めるようになりますが、「文字が読める」ということと、「イメージを浮かべながらお話を読み進められる」ということは別のことです。ですから、やはり読みきかせの大切さは減るものではないのです。

二年生ころからは、一冊の本を一章ずつ何日もかけて読んでやつたり、時には何巻にも及ぶものを数か月かけて読んでやつたりということにも挑戦でき、親のほうももう一度その本を味わい直す楽しいひとときになります。でもその時期もそう長くはつづきません。



「読」読書の時期は卒業しました。彼は、話の先が早く知りたくて、学校からかえると二つそり先を読み進んでしまつて、夜の読みきかせのときには「もう最後まで読んだ」と言うようになり、ついに「お母さんが読むと、遅くてもどかしいから、もう自分で読む」と宣言したのです。

こう考えると、子どもに本を讀んでやることのできる期間って長くて十年くらいかも知れません。だからこそ、この期間に、子どもとともにたくさんの絵本に出会って、子どもとともに育つていつかはしいと願うのです。

最後に、私のこの不慣れた連載にたくさんの方からお手紙をいただきありがとうございます。とても励みになりました。なかなかお返事を差し上げられませんが、ともに子育て中の仲間同士として、これからいろいろと教えていただけると幸いです。

- ☆「いよいよやえん」 中川李枝子作／大村百合子絵 (福音館書店刊)
- ☆「もりのへなそうる」 渡辺茂男作／山脇百合子絵 (福音館書店刊)
- ☆「森おぼけ」 中川李枝子作／山脇百合子絵 (福音館書店刊)
- ☆「たんたのたんけん」 中川李枝子作／山脇百合子絵 (学習研究社刊)